

氏 名 大崎 綾子
 学位の種類 博士（芸術学）
 学位記番号 博甲第 7829 号
 学位授与年月 平成 28 年 3 月 25 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 審査研究科 人間総合科学研究科
 学位論文題目 近現代における日本刺繍の研究

主 査 筑波大学教授 博士（芸術学）五十殿 利治
 副 査 筑波大学教授 博士（芸術学）守屋 正彦
 副 査 筑波大学教授 Dr. phil 長田 年弘
 副 査 大妻女子大学准教授 博士（学術）中川 麻子

論文の内容の要旨

（目的）

日本における刺繍に関する研究は、従来は染織史の一部としてなされる場合が多く、刺繍そのものを対象とした専門的な考察は限られている。そうした専門的な研究についても、刺繍の研究者や職人等によって行われたものが大多数であり、技法が検討の中心となっているという問題点がある。しかも、明治時代以降の刺繍を対象とした考察はさらに限定されており、作品が戦災や震災によって失われている状況も手伝って、作品研究が進んでいない現状がある。

そこで本研究においては、技法と図案の観点から、明治時代から現代までの刺繍作品の体系化を目的とする。

（対象と方法）

本論は論文編と資料編から成り、論文編は序章、五章、結語、そして資料編は図版・表、年表、参考文献によって構成されている。

序章においては、先行研究を概観した上で、考察対象を明示し、論文の課題を提示する。第一章では近代以前の刺繍を概観する。第二章以下は、現存作品の検証ならびに文献資料の渉猟に基づいて、各時代の考察に移る。まず明治時代の刺繍、第三章では大正時代および昭和戦前期の刺繍、さらに第四章では昭和戦後期から現代までの刺繍ならびに現代美術における刺繍技法の活用について検討を加える。第五章では論文中で触れた作品について刺繍技法、そして近現代における教則本の技法について整理する。結語においては、以上の議論をまとめた上で結論を導き、さらに今後の問題点を述べ、研究の展望を示

す。

(結果と考察)

著者は序章において研究目的を明らかにし、先行研究を整理して、問題の所在を明らかにする。第一章「近代以前の刺繍について」では近代以前の刺繍を概観するため、日本では最古の伝世品である《天寿国繡帳》、中世の繡仏や能装束、近世の小袖や祭の懸装品等について、糸の状態などに注目しながら精密に技法を確認する。第二章「明治時代の刺繍」は明治時代の刺繍について、万国博覧会や内国勸業博覧会等の出品や入賞等の記録を丁寧に整理するとともに、西洋からの刺繍技法の移入、洋館の内部装飾に使用された美術染織、礼服や宮廷服など洋装の刺繍、さらに刺繍教育に関して考察を進める。

第三章「大正・昭和時代戦前の刺繍」では大正時代と昭和時代の戦前期については美術としての刺繍の普及が問題となるが、産業としての刺繍、藤井達吉等の工芸家の作品制作、帝展における美術として認知と代表的な刺繍作家、刺繍の啓蒙活動について検討する。第四章「現代の刺繍」では現代の刺繍を対象として、戦後から現代までの動向を、官展を引き継ぐ日展の刺繍作家、重要無形文化財の指定とこれに関わる日本伝統工芸展と関係作家、さらに現代美術における刺繍技法を取り入れた作家の作品について考察を進める。第五章「刺繍技法の変遷」では、本論文において取り上げた作品の刺繍技法を時代別に整理して一覧を作成するとともに、近代以降の技法についても技法書を中心にまとめる。

最後に以上の考察を総括し、著者は明治時代において刺繍は産業として存続する一方、美術の一分野として確立したとし、刺繍作家が伝統を引き継ぎつつ、一般の普及に貢献したと述べる。このように職業として、美術として、そして実用と教養としての刺繍が近代の刺繍を形成したのであるが、戦後は伝統技術の継承、無形文化財保護の必要性が高まるが、現在は経済のグローバル化によって工芸全般と同様に刺繍産業は低調であり、今後は支援がさらに求められると結論する。そして、刺繍技法については、作品研究のためにさらに基礎資料を収集に努めるという今後の課題を提示して論を締め括った。

審査の結果の要旨

(批評)

先行研究がきわめて限られた研究課題であるために、著者が基礎資料の収集に相当の労力を費やしたことは、資料編に収録された諸表、各万国博での刺繍作品の一覧表、とりわけ 20 頁近い克明な刺繍作品関連年表からうかがえる。同じく、刺繍技法について、歴史的な経緯を踏まえ、かつ一般社会における普及状況を加味してまとめるという課題に熱心に取り組んだことが本文中随所に反映されている。

こうした基礎資料の収集に基づいて、著者は明治以降の刺繍について、はじめから美術作品として自立した刺繍を自明とはせず、視野を限定しない広範な議論を構築することに努めており、それが本論で取り上げられた多様な論点に反映されている。その結果として、刺繍技法と図案という点から近現代の刺繍を考察して、体系化を図るという所期の目的は概ね達成されており、資料的な価値の高い論考となっている。

今後は、引き続き研究対象に係る現存作品の発掘と実見調査を進めることにより、そしてまた刺繍作家についても、作家自身や関係者の個別のインタビュー等による資料収集を広範に行うことにより、近現代の刺繍に関する一貫した史的展望を構築する努力が求められよう。また研究対象に「日本」という限定があるとしても、近代以降、とくに現代においては芸術も芸術家も、国内に閉じられた活動をして

審査様式 2 - 1

はいないのが実態であり、たとえば万国博覧会での反響、海外での手工芸展等、国際的な視点の導入についてもより積極的な対応を求めたい。

平成 28 年 1 月 20 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。